



慶應義塾大学ビジネス・スクール

気づいてみたら身につけていたもの

5

私は 38 歳で大学を卒業した。専攻したのは社会学である。卒業後は修士課程への進学も考えたが、結局、いわゆる一般事務の仕事に就いた。特別にキャリアがあるわけでもない女性の、しかも 40 歳を目前にした女性の就職はとて厳しかった。雇用形態は契約社員であるが、
10 採用担当者の話を真に受けると、大学の通信教育過程を修了したことを評価されての採用ではあったらしい。

久しぶりに仕事に就いたことそれ自体からは、一応の満足を得た。一緒に仕事をするようになった仲間は、大卒と高卒が半々くらいだろうか。大卒らしく働かなければと少し気負ったが、
15 実際に仕事をはじめてみると刺激が少なく、正直なところ、物足りない仕事だった。「ここは大学で学んだ知識が活かせる場ではない」と思えてならなかったからだ。ところが、我慢しながらも半年ほど仕事をしているうちに、ここは大学で学んだ知識を生かす場だとは言えないが、それでも私が最近になって身につけた「何か」が、間違いなく今の仕事に生きて
20 いると考えるようになった。それはいったい何であるのか。これから綴る文章の中にも書き出してみる。

このノートは慶應義塾大学ビジネス・スクール博士・修士課程併設科目「ケースメソッド教授法特論」の教材とするために、竹内伸一(ケースメソッド教育研究所)が協力者へのインタビューを行って作成した。(2004. 10)

本ノートは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、ノートの複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール(〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町2丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail case@kbs.keio.ac.jp)。また、ノートの注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/case/index.html>。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、本ノートのいかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またはいかなる方法(電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない)による伝送は、これを禁ずる。

Copyright©2004 は慶應義塾大学ビジネス・スクールが保有する。

結婚、退職、そして年齢を重ね

こんな話はすでに「今は昔」なのだが、24～25歳になっても結婚予定のない女性がクリスマスケーキに喩えられていた頃、結婚退職は寿退職などと呼ばれていて、女性の幸せの典型だった。25歳で寿退職した私はめでたくクリスマスの日に売れたケーキであり、仕事を辞めて家庭に入ることには何の戸惑いもなかった。しかし、実際に家庭に入って毎日家事だけをしていると、自分と社会との距離が気になり始めた。それは一種の不安感でさえあり、何らかの形で社会に参加したいという思いから、派遣社員となって仕事を続けた。ところが、30歳を過ぎると仕事の内容に大きな変化がでてきた。派遣会社から紹介される仕事の数は減り、職務内容も雑用的なものが多くなっていった。仕事を選べる立場から、もらえる仕事を「やらせていただく」という立場に変わった。一般事務職は、結局、年齢でふるいにかけてしまう部分が多い。こういう仕事を続けることに私は抵抗を感じるようになった。

15 大学での学び直し

私は高校を卒業後、2年制の専門学校に進み、そのまま就職した。大学受験をしたのだが、現役合格に失敗した。「浪人したい」と親に頼んだが、許されなかった。「女の子は学歴がない方がいい」と信じて止まなかったのが私の両親だった。

20 あまり知られていないことであるが、専門学校の授業に本当についていこうと思ったら、そのワークロードは意外にきつい。もちろん学ぶ内容はテクニカルなものを中心なので、暗記ごとや練習問題のような課題が多いのだが、私は大学に行けなかったことが残念でならなかったもので、そのくやしさを専門学校の授業にぶつけた。大学に行った人の何倍も勉強してやろうと思った。その意味では、私の専門学校時代の実りは大きかった。

25 ただ、大手の商社で仕事をするようになり、優秀な高学歴の人たちと机を並べて仕事をさせてもらうようになると、大学できちんと勉強してきた人たちは、私とは間違いなく何かが違うと思うようになった。私はその違いを学歴に見出していた。それと同時に、今からでも、私も大学で学びたいと考え始めた。結婚をして実家を出ているので、もう両親に阻まれることはない。幸い、夫は私が大学で学ぶことに協力してくれて、理解もあった。かくして、私の学びの場さがしが始まった。

しかし、30歳を過ぎてからの大学受験というのは一大事業である。当時は社会人入試とい

う門も少しは開けつつあったが、高い競争倍率をくぐり抜けるためにはかなりの準備が必要だと思えた。準備に時間がかかるのはかまわないのだが、お金がかかるのは困った。その頃、通信教育課程という学び方を知ることになる。けっこうたくさんの大学がカリキュラムを提供していた。

5

私にとって学びの場としての通信教育制大学は、いくつかの点で好都合であった。受験のハードルが低い、仕事を続けながら学べる、学費もそれほど高くない、そして何より、夫の転勤があったとしても、学業の継続に影響が及ばないことが魅力だった。その反面、私が選んだ大学の通信教育課程に入学して学位を得て卒業する人は、3%くらいだと当時は言われていた。安易な気持ちでは続けられないこと、すべては自分の努力次第ということを覚悟しての挑戦であった。それでも、カリキュラムの内容が充実していて、より高度な教育が受けられる大学がいいと思った。自分に高いハードルを越えるための負荷をかけることで、私のチャレンジ精神は逆に掻き立てられた。

10

15

「もう一度やれ」と言われたら遠慮したい経験

仕事を続けながら学ぶのは楽しくもあったが、肉体的にも精神的にもきつかった。スクーリングに通う時間を捻出するために、会社にはずいぶんと下手なウソもついた。また、毎日のようにレポート作成に追われた。レポートを提出する封筒に押される消印を締め切り日にしてもらうために、午前零時の数分前に本局に駆け込むことが日常となった。家が郵便局の本局に近かったのが不幸中の幸いだった。

20

25

30

どうにか単位取得が進むと、卒論に着手できるようになって、曲がりなりにも研究と呼べそうな世界を知った。ここまで来るのもたいへんだったが、ここから先の山には、別の高さがあることを感じた。私は卒業研究にコミットするために、仕事を一時中断することにした。この判断が実は卒業後の就職にマイナスに響いてくるのだが、私自身は卒業研究をしっかりとやるのだから、それは「当然必要なこと」だと考えた。通信教育課程では卒業論文の指導期間が最低2年となっている。これは決して短い期間ではない。しかし、研究の何たるかをまったく知らなかった私にとっては、特別に長く感じることもなく、むしろ必要な時間だったのではないかと考える。卒業面接でも特別に感慨深いということはなかったが、論文を書き上げるまでの苦労話をうんと語らせてもらった記憶がある。

こうして無事完走できたのは、第一に指導教授に恵まれたこと、第二にゼミのOBOG ネットワークに加えてもらえたことで、いつも仲間がいてくれたことが大きかったのだと思う。夫の励ましも大きかった。振り返るといい思い出だけれど、今からまたもう一度やれと言われたら、やはり遠慮したい。あれほどの睡眠不足の日々には、もう耐えられないからだ。

5

卒業式には夫が来てくれて、私の卒業証書を見て言った。授与された学位記には、通信教育課程という言葉などどこにもないと。人間関係学の学士として胸を張っていいのだと、ぽんと肩をたたかれた。

10 大学での数年間、私の知的好奇心は十分に満たされてきた。しかも、学びを重ねることで新たな好奇心が芽生えることを知った。少なくとも「何か探求すること」は私にとってはもはや何の苦痛でもなく、むしろ大きな喜びであった。

15 卒業することが最終目的ということではなかったのに、ハードルをひとつ越えたという実感はそれほどなく、むしろ、学びの時間がここでひと区切りついてしまうことの寂しさの方がよほど気になった。

再び仕事に就いて

20

卒業後もできれば、知的好奇心を満たすための時間を持ち続けていたかったのだが、当面の収入を回復させることを優先した結果、その夢は一度しまっておくことにした。それにしても40歳に近づくと女性の就職は厳しい。ときどき補助職ではない求人案件とも出会うが、そういうものは得てして労働条件が悪い。本当にキャリアを作りたい人ならば、労働時間が長くても内容重視で仕事を選ぶのだろうが、クリスマスケーキ世代の女性である私にはそこまで割り切った気持ちにはなれない。体力的にもそこまでの自信がないし、それよりも毎日おいしいものを自分で作って食べて、ゆっくりとお風呂に入りたい。結局、物足りなくて辞めた一般事務に戻るようになった。

25

30

私が就職したのは、コールセンターの運営を委託されているいわゆるアウトソーシング会社であり、客先のコールセンターにチームまるごと派遣されている。配属されたのは、某金融機関のコールセンターの人事・総務部門であった。まずは総務関係の仕事の補佐から始まった。まったく目新しさのない仕事だ。程なくして、今度は主担当としての仕事を与えられ

た。それは物品管理だった。これもまったく目新しさのない仕事だ。私に与えられるのは結局のところその程度の仕事かと思うと、あれだけ苦勞して卒業したことはいったい何だったのだろうと、そんなことを考えても何もいいことがないと分かっている、つい考えてしまう。仕事を中断して学業に励んだことが本当によかったのか。働き続けていた方が実はよかつたのではないかと疑いもした。

ところが、実際に業務に就いてみると、この会社の物品管理は要改善点のかたまりであるように思えた。物品の受け渡しや記帳の手続きが煩雑で、物品管理に時間と手間をかけ過ぎている。この仕事で月平均30時間程度の残業が発生していたというから、前任者が残業代欲しさに工程を肥大化させていったことも疑われた。前任者は自分の縄張りとしての仕事を確立させ、自らの存在価値を周囲にアピールしたがるタイプの人だった。そのことも影響しているかもしれない。でも、この状況は必ず改善できる……。

そんな考えが頭を巡ったとき、「こんなことを考えている私は、今までの私とはかなり違う」と感じた。私は大学で学んだこの数年で、間違いなく何かを身につけたのだと思った。

私はこの状況を改善するため、直接上司に現在のやり方では効率が悪いと指摘し、代わりに新しいやり方を提言した。私の提言はすぐに上司に受け入れられ、物品管理のプロセスがガラッと変わった。たかが物品管理と思うかもしれないが、抵抗勢力というものはこちらのところにも立派にあるのだ。前任者は職場で大きな影響力をもった女性だったので、彼女が3年間の長きに渡って大事にしてきたやり方を否定することは、彼女をはじめ、その仲間たちをおもしろくない気持ちにさせた。しかし、新しいやり方はほとんどの社員に何らかのメリットをもたらし、それが次第に実感されるようになっていった。今ではみんなが昔からそうしていたかのように、新しいやり方にすっかり馴染み、この仕事で残業が発生することなどあり得ない状況になっている。

業務改善という言葉は、世間ではどうの昔に興味のピークを過ぎた話題だと思うが、私にははじめての経験だ。でも、このとき不思議と、この職場の業務改善は上手くいく気がしていた。私ひとりでやるわけでもない。助けを求めることもできる。上手くいくことがあるとすれば、それはどういうときか、だいたい見通しがついた。そして事実、ほとんどその通りにものごとが進んだ。

この改善は、これまでほとんど放置されていた業務プロセスを一度疑ってみようという業務改善ムードに火をつけた。現在でもいくつかの改善活動が進行中である。そして、この種の活動の多くに私に関わるようになった。私個人が職場とこのような形で関わることは、少

なくともこれまでの、大学で学ぶ前の私の職場経験では一度もなかったことだ。

私が身につけていたもの

5

大学に籍を置いている間は、確かに莫大な時間を勉強に投入した。来る日も来る日もレポートに追われ、コンビニに毎日のようにコピーに走り、家の中がワープロから吐き出される排紙でいっぱいになったあの日々。卒論の研究のためにアンケート用紙を何度も作り直し、アンケートに協力してくれる幼稚園に100件近く電話をかけた。知らない人にこんなにたくさん電話をするのは初めての経験だった。幼稚園や小学校に不審者が押し入り、子どもを傷つける事件が続いていた時期だっただけに、「今は勘弁してくれ」という反応が多かった。そんな中で、何十の幼稚園に説明とお願いに行っただろうか。アンケートが取れると、調査結果を明け方までかけてパソコンに入力して、統計処理ソフトを回した。たいへんだったのはこの後の作業で、統計処理によって得られた結果を分析して、考察を文章に書き起こすことだ。10行くらいしか書き進まない日もあった。こんな生活がある時期において続けたことで、きっと私に「何か」が身についたのだ。

身についたものの姿かたちを、私はうまく説明できないのだけれど、私の中にそのようなものが出来上がったことだけは、はっきりと実感できている。それは、大学で多くの知識を吸収したり、卒業研究に没頭していくそのプロセスで、自分でも気づかないうちに身につけていた「何か」なのだろう。